

(1) 職業名

大学教員（教授、准教授、講師、助教）

(2) 仕事の内容

大学教員の仕事は、大きく分けて「講義」、「研究」、「大学運営・社会貢献」の3つがあり、国公立や所属学部（大学院、研究所）、役職によって、その比率は大きく変化します。「講義」を担当するのは教授、准教授、講師であり、自分の研究分野に近い教養科目や専門科目を、年間数科目（人にも寄りますが、2～5科目が多いようです）担当します。1回90分の講義を15回実施した上で期末試験を行うスタイルが多く、毎回事前に講義の内容・進め方を入念に準備し、当日も学生の反応を見ながら、きちんと理解・関心をもってもらえたかどうか、常に気を配りながら講義を進めています。

「研究」は大学教員の本務とも言え、研究室やゼミの学生を指導しながら、常に得られた知見を基に、これまでにない新しい学理を社会に発信し続ける必要があります。理系の教員であれば企業と共同研究することも多く、研究の遂行に必要な資金を得ながら、学術的な観点からの成果を報告しなくてはなりません。昇進も学術論文の質ならびに量によって決まることが多いため、若手教員はまずは研究で成果を上げることが求められます。

「大学運営・社会貢献」は主に教授、准教授が担う仕事であり、学生の教育や入試を確実に遂行しつつ、社会から求められる大学の有り方を常に考える必要があります。また、シンポジウムやテレビ、新聞紙上などで、特定分野の現状分析、動向予測、問題点の抽出や解決策の提示を求められることもあり、日頃から日本国内のみならず、グローバルな観点での教育・研究活動を行うことが必要となります。中高生や市民向けの講座、オープンキャンパスなどを通して、「大学に入学してきた学生を、いかに社会で通用する人材として輩出しているか」をわかりやすく伝えることも、教員の役目の一つとなっています。

(3) 仕事に就くための必要な資格

いわゆる国家試験などの資格は必要ありませんが、現在では理系のみならず文系の教員も、博士の学位を取得していることが求められているようです。そのため、大学卒業後に大学院修士課程、博士課程に進学し、博士論文をまとめて審査に合格、博士の学位を授与される必要があります。その後もさらにポスドクや任期付き研究員として、研究業績を積み上げていかななくてはなりません。ただし、企業に就職後、もしくは芸術・体育の分野で卓越した成果を上げた方が大学に教員として採用される場合もあり、いずれのキャリアパスであっても、「オンリーワンかつナンバーワン」になれるかどうかにかかっているように思います。

(4) 仕事上での喜びや充実感

この質問については、中学高校の教諭と同様「学生の成長を感じた時」が回答になるかと思います。学部4年生で自分の研究室に配属となった学生が、指導の結果、1年後（学部卒業）または3年後（修士課程修了）に「将来存分に活躍するポテンシャルを身に付けて卒業していく」様子は、本当に感慨深いものがあります。卒業後に研究室に遊びに来てくれた時など、「すっかり偉くなったようで、これからも是非、私ならびに現役の研究室学生を懇意に」とお願いすることもあり、大学時代に限らず、先輩後輩のつながりは一生の宝だと思っています。

(5) 仕事上での辛さや苦しさ

「仕事量の多さ」を挙げたいところですが、実はこの「仕事」はすべて自分で作り出したもので、その点が大学教員の特徴の一つかと思います。すなわち、大学教員はいわゆる「一国一城の主」的な面があり、必ずしも会社の上司に当たる人が居るとは限りません。そのため、前述の「講義」や「大学運営」以外の時間の過ごし方は、基本的に教員個人の裁量で決めることができ、共同研究の進め方や国内外の学会への参加、論文や解説記事の執筆など、多くを自分の考えで進めることができます。時折「締切が近づいているにも関わらず、学生の研究の進みが芳しくなく、さてどうしようか」と心配になることもありますが、仕事を主体的に進められるというのは、何にも代えがたいものだと感じています。

(6) どのような学校生活を送るべきか

まずは、学校で習う各科目をしっかり理解し、自分のものになるよう繰り返し学習を進めて下さい。その上で、ただ「先生の話をおとなしく聞いているだけ」ではなく、「自分が代わりに教壇に立つとしたら、どのような話し方をするか（例えば、寝ている生徒に何て言いますか？宿題のレポートを2～3行で済ませた生徒にどのような指導をしますか？）」を想像しながら、毎日の授業に参加してみてください。自分の得意分野を磨くためにも、真摯に日々の積み重ねをしていくことが肝要だと思います。

以上